

バレエ実技における評価の基準について

教授 小山 久美

はじめに

学校教育においてバレエ実技を指導する場合、「評価を行う」ことは必然的に付随してくる事柄である。本学においても然りである。評価とはつまり成績であるので、点数を付けることが求められるわけであるが、バレエはもともと点数とは無縁の芸術であるから、毎年学生たちの名前を前に悶々とすることになる。もちろん音楽大学において、バレエだけがこの問題を抱えているわけではないと承知をしているが、この機会にバレエ実技における評価の基準について考察を深めてみたいと思う。

バレエ実技に点数を付けて評価するのは、成績を付ける必要がある学校教育のほかには、コンクールという存在がある。私自身もコンクールの審査員の経験はいくつかあるが、そこでもやはり思い悩む。しかしコンクールでは、最終的に順位を付けるのが目的であるから、相対的にある程度の基準が自ずと決まっていくところがある。しかし、学校教育の成績の場合は、絶対評価として考える必要があるであろう。また、評価の観点も、コンクールでは現在の時点であるのに対し、成績の場合は一年間に及ぶことであり、更に難しい部分があると言えるのではないか。

バレエコースにおける現状を正直に申せば、教員の「主観」によって評価をせざるを得ない部分があることは否めない。また、バレエ実技の性質上、同様の授業を複数の教員で担当することから、評価の「ズレ」が生じることも想像される。今回はこうした問題点から、バレエ実技における評価の基準について整理し報告するものである。考察に当たっては、類似した要素を持つものとして、フィギュアスケートの採点の仕組みを参照するところから始めたい。

1. フィギュアスケートにおける採点法

2003年までは、フィギュアスケートの採点は「6点満点」で行われていた。審査員の印象で決まる側面があり、審査員同士の裏取引さえ行われていたといわれる状況だったらしい。不正ができないように採点システムの変革に乗り出したという経緯があり、現在の採点システムが誕生した。

現在のシステムでは、採点は大きく「技術点」と「構成点」に分けられており、それぞれを別々の審判員が採点をしている。

技術点 = 技ごとに決められている基礎点 + 技の出来栄

構成点 = 表現の美しさを評価 (5つの要素に細分化)

①スケーティングの技術

②要素のつながり

③演技力／実行力

④振付／構成

⑤音楽の解釈

「技術点」は、まず技の難易度によって基礎点が決まり、さらに技の出来栄をプラス3からマイナス3までの7段階で評価し、それらを合計する。芸術的な要素を持つ「構成点」は、曖昧になりかねない要素を項目ごとに細分化することによって評価のブレを抑えようとしているようである。システムとしては、定められた基準から判定される点数を積み上げていく形だと言える。

2. 短期大学部バレエコースにおける試行

主な実技授業を担当する3名の教員たちで、共通の採点システムを試行した。

評価は100点満点とし、観点別評価を導入して以下のような項目に分け、採点票の冒頭部分に記載した。

①出席状況 (20点)

②テクニック・技術力 (30点)

③バレエに取り組む姿勢及び1年間を通じた上達度 (30点)

④試験 —— アンシェヌマンの順番を覚えること (10点)

授業内の注意に対する反応 (10点)

①出席状況	②テクニック	③取組み姿勢・上達度	④試験	合計
20点	30点	30点	20点	100点
欠席回数 × -2 遅刻回数 × -1	最低点 15点	最低点 15点	順番 10点 注意 10点 最低点 5点ずつ	

[留意した点] 「計算の結果不合格になった」という事態を避けるため、最低点を設けて60点を確保できるよう配慮した。また、試験時におけるテクニック完成度を審査対象とするだけでは、入学時から評価がほとんど変わらない可能性も出てくるため、上達度という項目を設けた。「注意に対する反応」を項目として挙げた理由としては、教師としての経験上、名前を呼んで個別に与えた注意に対しては、まず全員が反応を示すが、本当に必要なことは「全員に対して」注意したことについても、「自分のこととして」受け止めて反応で

きるかどうかである。逆に言えば、これができないと上達は見込めないことから明記した。

試行の結果は下記のとおりであった。

【良い点】 複数の教員で採点基準を同じくすることができる。学生や外部に対してもある程度明瞭な基準を打ち出すことができる。

【問題点】 同じ学生に対して、6 コマの授業があると、よほど出席状況に違いがない限り授業ごとの点差がほとんど表れない。また、項目ごとの点数を見極めるのに時間がかかり、算出に手間取ってしまう。

3. フィギュアスケートの採点基準との比較

フィギュアスケートにおいて、採点が「技術点」と芸術点の延長線上にある「構成点」に分けられていることは、バレエに置き換えて考えてみた場合でも大変理解できる。ここで、その算出方法について、バレエと比較しながら検討してみようと思う。

まず「技術点」だが、フィギュアスケートでは、あらかじめひとつひとつの技に基礎点を設け、更にその技を成功したか失敗したかを判定して「実際の」基礎点を出し、その上で、技の「出来栄え」を判定しクオリティーを評価している。技は大別すると、ジャンプ、スピン、ステップ、スパイラルがあり、なかでもジャンプは6種類である。それぞれのジャンプにシングル、ダブル、トリプルがあったとしても、まだまだ数えられる範囲であろう。スピンとステップについては、レベルを4段階に分けそれぞれの基礎点が定められている。またスパイラルについてはすべて同一の基礎点とし、出来栄え点によって評価される。このように系統立てて技を整理し、それぞれで細かく点数を決めそれらを積算していくには、審査員たちの労力もそれなりのものになるであろう。しかし、その明確な積算方法の詳細を公表できることは、やはり審査の信頼性につながっていると思う。

ではバレエにおいて、同様にひとつひとつの動きに対して明確な採点方法があるかといえば、バレエのステップには数えきれないほどの種類がある。たとえば、1時間半の授業でそのすべてを取り入れるのは到底不可能であり、1年間を通じてなるべくそのすべてを学んでもらおうと心がけているほどである。フィギュアスケートのようにひとつひとつの動きにたいして採点するということはできないし、したがって当然一度の試験では審査しきれないということになり、解決策として参考にすることはできない。

次に、「技術点」に加算される「出来栄え点」であるが、こちらはバレエに共通している要素が大いにあると思う。スピード、高さ、正確さ、姿勢などを判定してそのクオリティーを評価するのは、そのままバレエにも当てはまりそうである。この出来栄え点については、フィギュアスケートでは、プラス3からマイナス3までの7段階で評価している。例えばジャンプについては、「高さや距離」のほか、「身体を十分に伸ばして着氷しているか」「構えてから踏み切るまでの時間」「空中での姿勢」など多岐にわたる着眼点を共有している。バレエにおいても、テクニックに対するクオリティーを評価するのは妥当なことだと思う。バレエにおける評価の際の着眼点としては、

- ・アンデオール（脚を外側に回して使うこと）
- ・エクステンション（脚の高さ）
- ・足裏の使い方（つま先がきれいに伸びるか）
- ・ポールドブラ（腕の使い方）
- ・エポールマン（上体の使い方）
- ・重心の捉え方（体幹、バランス、移動の仕方）
- ・全身のコーディネーション（リズム感）

というような要素が共通認識として挙げられるであろう。

フィギュアスケートの「構成点」は、5項目において採点されているが、その内容を見ると、改定された審査ルールにおいてもやはり難しい部分を含んでいるように見受けられる。「要素のつながり」を項目として掲げているのはおもしろい。バレエにおいても「つながり」の部分は若いダンサーにとって特に見落としがちな部分であるが、踊りの質を高めるには大変重要な要素である。「演技力」も当然対象になるであろう。バレエでは表現力は音楽性によるところも大きいのだが、表情や立ち居振る舞いといったプレゼンテーションもほぼイコールの要素として存在する。興味深いのは、「振付」が審査の対象になっていることである。こちらについては、バレエコンクールの場合では考えられるが、バレエ実技の成績としての評価では対象とはならない。フィギュアスケートにおける「出来栄点」と「構成点」の違いは、バレエに置き換えると混同する部分がありそうだが、ひとまずバレエにおける芸術点として考えられる要素を整理すると以下になるであろう。

- ・プレゼンテーション
- ・音楽性
- ・つながりの丁寧さ、正確さ
- ・踊りのセンス
- ・容姿

4. 短期大学部バレエコースにおける評価

これらの考察をもとに、短大での評価方法をあらためて検討したいと思う。

Ⅱで述べた試行においては、60点を割り込まないように配慮する必要があった。また、項目ごとに点数をつけていく場合、同じ学生に対しては授業がいくつあっても評価に違いが見られなくなってしまうという難点もあった。実際は、バレエ実技の評価をする以上、どの授業であれ同じになるのはある意味当然とも言えるが、大学における単位としての観点からは、やはり適切であると言い難いであろう。

以上を踏まえ、新たな評価基準として次のような考え方はどうだろうか。

60点を最低基準点とし、加点要素を1項目5点満点として加点していく。

[加点要素]

技術力—— ①基本的な筋肉の使い方（アンデオール／プリエ／床と足裏の使い方）

- ②ポジションの正確さ（上体／ポールドブラ／エクステンション）
- ③動きの正確さ（全身のコーディネーション／リズム／つながり）
- ④空間の使い方（動きの大きさ／伸びやかさ）
- 表現力—— ⑤プレゼンテーション／容姿
- ⑥音楽性／センス
- 学ぶ姿勢—— ⑦学習意欲／向上心／出席状況
- ⑧集中力／理解力／協調性

項目ごとに採点しその合計点を出す方式よりも、出席に問題がない段階で最低基準点（60点）を与え、加点要素を上積みしていく方式のほうが、計算もしやすく、なにより学生ごとに個性や頑張り度を評価してあげることができるのではないかな。

5. 評価にあたって

短期大学部バレエコースには、現在1学年約30名の学生が在籍している。バレエ実技の授業は常にクラス全員を対象に指導がなされており、また基本的に学生は口を開く必要がない（身体を使うのみである）。そのため、いくら身体で表現する芸術を学んでいるのだと言っても、教員として学生に対する実質的なコミュニケーションが少ないのではないかという危惧があった。そこで、今年度は初めて全卒業年次生に対して個人面談を行った。それぞれ15分程度の面談ではあったが、1対1で会話をすることで、授業内では見えない部分を知ることとなり非常に有意義であったと感じている。「学生をよく知る」ことは、より正しく評価することにも関連してくると思う。

終わりに

もともと日本におけるバレエ教育は、個人の指導者を中心としたお稽古文化として行われている。そのなかで大学のカリキュラムとしてその指導体制を整えることは、私にとってひとつの大きなチャレンジでもある。大学教育に見合った指導内容と明確な学習意識はもちろんのこと、適切な評価方法も当然求められることであろう。来年度も個人面談は引き続き実施する予定であるが、こうした学生に対する理解を促進する取り組みのほか、他コースの状況を把握するなど、多角的な視点を持って適切な評価基準を整備し、大学における教育体制の充実に向けて努力していきたいと思う。